

# 社会学的社会運動論の国際的研究動向 ——2010年代以降を中心に

森 啓輔

## 1. はじめに

本論は2010年代以降の社会運動論 (Social Movement Studies) の、英語圏における国際的な動向についてレビューするものである。若手研究者が積極的に国際誌に投稿することが常態化しつつある現在において、国際的研究動向を日本語で書くことの価値も低下しつつあるのが現状だろう。今後このようなレビューは需要の低下と共に消滅していくであろうことを認めつつも、過渡期に現在を見据えつつ、本論では近年展開する社会運動論の動向についてレビューしていく。

社会運動論の日本語圏における大きな動向を示すレビューは、2004年に出版された『社会運動の社会学』(大畑他編)以降、入門者向けの書籍(濱西他2020)を除けば多くない。研究動向に関する論文に関しては、近年、政治学の視点から本田宏が社会運動論史を踏まえながら、政治学業界において展開する社会運動論について考察している(本田2022)。本田は、政治学の社会運動研究者のヴラブリコヴァ・カテリーナ(Vrábliková 2017)を導線にしつつ、社会学の社会運動論とは独立した形で政治学の社会運動論を論じている。他方、富永京子は、社会学の社会運動論を、隣接領域である政治学と文化人類学との関わりにおいて定位することを試みている(富永2021)。本田においても富永においても、専門分野内部に社会運動論を位置づける戦略としての貢献を確認することができ

る一方、社会運動論そのものは雑誌の水準においても元来学際的である点は見逃ごせない<sup>1</sup>、そのような土壌で様々な共同研究が国際的に成されてきた分野ではなかっただろうか<sup>2</sup>。本レビューはこのような関心から社会科学領域における社会運動論の大まかな動向を考察することで、しばしば筆者が会う、社会運動論の狭い下位分野のみをもってこれが社会運動論だと考えているような読者に対して、異なる展望を提供することができるものと考え。先行レビューによって政治学と文化人類学における社会運動論は既にレビューされているため、第二節ではまず、近年の社会科学領域全般における社会運動論の共通する興味関心についてまとめていく。次に第三節では、社会学の社会運動論でどのような研究動向が見られるのかを、いくつかのレビューに基づいて明らかにする。さらに第四節では、主要な国際誌である *Social Movement Studies* における最新の動向(2021-2023)について見ていこう。

## 2. 社会科学における社会運動論の研究動向

本節では、社会学以外の社会科学分野における社会運動論の研究動向について、学術論文を主たる対象としていくつかのハンドブックも用いつつまとめていく(Porta et al. 2015; Porta and Mattoni 2014; Roggeband and Klandermans 2017)。はじめに、社会運動論の社会科学領域におけ

る動向を見ていこう。表1は、1975年から2015年における英語圏での社会運動に関する論文の推移を、Google Scholarの検索結果に基づいて示したものである。この表を見ると、社会運動に関する研究論文は、社会科学において重要な下位分野になりつつあることが分かる（Roggeband and Klandermans 2017:2）。社会運動論の英語圏での研究は、社会学を中心として、政治学、人類学、歴史学、社会心理学、組織論、法学、コミュニケーション科学の領域で蓄積されていることが分かる。

比較対象として、日本語圏でも同様の傾向についてGoogle Scholarを用いて見ていこう（表2）<sup>3</sup>。日本語の社会運動に関する社会科学領域の論文数も、英語での検索と同様増加傾向にあ

ることが分かるだろう。ただし、社会運動論の日本語圏での学習者は、英語圏と比較すると体系的な理解の機会に恵まれてきたとは言えない。国際的研究の動向のみならず、日本語でのハンドブックやリーダーや学会誌でのレビューが相対的に少ないことは、学部や大学院教育における社会運動論の体系的な理解の機会を逃すという意味において課題であり続けている。

## 2.1. 共通関心：感情・戦略・インターネット

社会運動論に関しては、それぞれの学問領域において異なる関心がありつつも、Roggeband and Klandermans（2017:6-7）は、いくつかの点において昨今の共通する関心を以下のように見いだしている。

表1 専門領域における社会運動に関する出版物数（1975-2025）

	1975-84	1985-94	1995-2004	2005-2015
Sociology	6610	11700	35800	56200
Political science	2000	5400	18900	29700
Anthropology	1620	4120	14900	24900
History	2650	8111	16800	17700
Social psychology	1210	1940	5850	16900
Organization studies	50	133	719	5150
Law/legal scholarship	77	451	1690	5480
Communication sciences	5	26	131	864

出典（Roggeband and Klandermans 2017:3）

表2 専門領域における社会運動に関する出版物数：日本語圏（1975-2023）

	1975-84	85-94	95-2004	2005-2014	2015-2023
社会学	172	421	1150	2460	2860
政治学	57	106	424	919	1200
人類学	32	99	240	606	867
歴史学	67	107	232	528	750
心理学 <sup>4</sup>	71	159	372	660	908
組織論	38	77	152	239	262
法学	102	143	437	728	1090
コミュニケーション研究	3	6	26	88	128

筆者作成。

一つめの共通関心は、感情 (emotions) である。アクティヴィスト個人への注目は、アイデンティティと感情への問いに接続される。社会的アプローチは集合的アイデンティティについて扱う傾向がある一方、社会心理学者は集合的アイデンティティと、アクティヴィスト個人のグループへの同一化 (identification) 過程を慎重に区別する。人類学における意味構築の過程においても、社会的アイデンティティが運動参加を豊かにするさまや、集合的アイデンティティ形成における文化や「ハビトゥス」の役割について分析される。

感情と情動は、社会心理学や社会学、人類学研究において中心的な研究対象となってきた。社会学者はしばしば感情の戦略的な次元を対象とし、いかにしてアクティヴィストが諸個人を動員するために感情に訴えてきたのか、そして諸個人が運動の中に留まるようにどのように感情を扱ってきたのかを問う。感情はここでは、アイデンティティ形成と交渉のための重要な構成的要素と見なされている。社会心理学者の視点では、アイデンティティは感情よりも重要な地位にある。グループへの同一化の強さは、人々がグループに基づいた感情をいかにして、どの程度経験するのかに影響を与える。人類学者も同様に、感情的振る舞いの文化的に特徴ある側面について研究してきた。感情的・意味論的な文化的表現が考察の対象となるのだ。これら感情への注目が社会科学や社会運動論において注目を浴びている一方、政治学や組織論、法学の分野での感情への注目度は低い。

二つめの共通点は、戦略と戦術 (strategy and tactics) への関心である。社会運動の戦略と戦術的選択に関しては、政治学と社会学が注目してきた。近年の諸アプローチは、戦略を構造とエージェンシーの双方に影響されたものとして理解しようと試みている。構造主義的アプロ

チが政治的機会構造 (political opportunity) や運動文化などの構造的現象により主に構成される一方、昨今の関係的アプローチ (relational approach) は、戦略を相互行為によって形成されるものとして注目する。このことはまた、アクティヴィストが必ずしも機会に応じて行動しない理由や、彼らの最善の利益のために行動しているように見えない理由を説明するのに役立つ。またコミュニケーション科学者は、社会運動が公衆に対して可視化され、運動の目標のための公衆の支援を得るために行われる特定のメディア戦略に注目する。組織論者は、企業と社会運動の間の戦略的な相互行為について研究し、いかにして諸戦略と対抗戦略が展開するのかについて考察する。また法学者は、法と裁判の行使を特定の社会運動戦略として分析する。

三つめの共通点は、インターネットが社会運動において果たす役割についてである。これは主として、社会学とコミュニケーション科学において論じられてきた。社会運動研究者は、デジタルメディアの登場が社会的アクティヴィズムを再形成してきたことを主張している。インターネットは新たな形式の集合行動や集合行為を可能としてきたからだ。同定可能な会員型組織による従来の主流の社会運動と比べると、より個人化されデジタル機器によって媒介された集合行為の編成は、しばしば規模が大きくより早く大規模化し、政治的標的を追跡したり、異なるイシューを架橋することを柔軟に可能とする。インターネット・コミュニケーション・テクノロジー (ICT) を駆使することでアクティヴィストは、ウェブサイトやソーシャルメディアのアカウントを作成したり、オルタナティブなフォーラムを作り、彼ら彼女らの問題関心と目標についてより大規模の聴衆とのコミュニケーションを試みたりすることができる (Earl et al. 2010)。

上記の3つの共通点は、社会科学領域全般の社会運動論の近年における共通項であった。以下では、社会学の社会運動論の動向について見ていこう。

### 3. 社会学の社会運動論の新動向

次に、社会学の社会運動研究における2010年代の新動向を押さえていく。本節では、マスメディアと社会運動の関係についての研究、運動の戦略研究、そして欧米の社会学者による昨今展開が著しい研究について、Roggeband and Klandermans (2017:14-32) を参考に見ていく。

#### 3.1.1. マスメディアと社会運動

運動とメディアの関係に関する初期の研究は、メディアの政治経済（例えば、利益創出への焦点）と組織のプロセス（例えば、ジャーナリストがどのようにニュースを識別し、カバーするか）が、抗議イベントの報道にどのように影響したかについて主に焦点を当てていた（McCarthy, McPhail, and Smith 1996; Myers and Caniglia 2004; Oliver and Meyer 1999; Smith et al. 2001）。他方で、新聞データをソースとして使用することに伴う方法論的な問題を強調している研究者もいる。たとえば、選択バイアス、つまり、どのような出来事がニュース価値があるかとみなされ、一般大衆に提示されるかを決定するジャーナリズムの規範や職業上のプロセスを鑑みると、新聞は抗議活動に関するデータ源としては不十分である（Earl et al. 2004; Strawn 2008）。その結果社会学者たちは、運動とメディアの関係の他の側面に注目し、メディアがどのように社会運動組織の正統性を構築するのか（あるいは否定するのか）を分析したり（Rohlinger and Brown 2013; Sobieraj 2010）、運動がどのように書籍、音楽、芸術などの様々な媒体を用いて集

合的アイデンティティを育成し、動員を促進するか（Roy 2010）、運動の視覚的表現がどの程度、アクティヴィストやアクティヴィズムに関する物語を強化、あるいはこれに挑戦しているか（Corrigan-Brown and Wilkes 2012; Doerr, Mattoni, and Teune 2013; Rohlinger and Bunnage 2015）、そして運動理念の拡散と隆盛におけるメディア（およびその他のアクター）の役割などを考察している（Andrews and Caren 2010; Banerjee 2013; Rohlinger and Klein 2012）。

ICTは、アクティヴィストと一般大衆とのコミュニケーション方法を劇的に変化させた（Earl et al. 2010）。アクティヴィストは、自分たちの問題や目標をより多くの聴衆に伝えるために、ウェブサイトやソーシャルメディア・アカウントを開設したり、オルタナティブ・フォーラムを作ったりすることができる（Bennett and Segerberg 2015; Earl et al. 2010）。ICTが魅力的なのは、アクティヴィストが自分たちの考えや問題を一般大衆に提示する方法を、より自由にコントロールできるからである（Lievrouw 2011）。もちろん、ICTは単独で機能するわけではない。アクティヴィストが仮想空間で流通させるアイデアが、適切な条件さえ整えば、主流メディアに取り上げられる可能性があるという証拠がある（Rohlinger and Brown 2013）。組織のウェブサイト、ソーシャル・メディア、オンライン・フォーラムは、動員においても重要な役割を果たしている（Earl et al. 2010）。

ICTが参加コストや参入障壁を削減する一方で、社会学者たちは、ICTが運動のプロセスを覆すと普遍的に主張しているわけではない（レビューについてはEarl et al. (2010) を参照）。ICTが、リーダーシップ、組織化、動員、そして集合的アイデンティティについての社会学者の思考に挑戦していることは明らかである

(Crossley 2015; Maney et al. 2015)。同様に、ICTの出現は社会学とコミュニケーション・スタディーズとの相互融合を加速させたが、TwitterやFacebookのような商業的なコミュニケーション構造がいかにアクティビズムを阻害しているか、あるいは新しいテクノロジーによって根本的に変化しているかどうかについては、ほとんど合意が得られていない。これらの議論がどのように解決されるかは、研究者が社会運動現象をどのように概念化し、研究するかに影響するため、重要である (Monterde et al. 2015)。

ICTが進化し続け、市民やアクティヴィストがそれをどのように利用しているかを考えると、運動とメディアの関係は研究の機が熟している。例えば、ICTの台頭は、組織や運動のメッセージにとって重要な意味を持つかもしれない。組織レベルでは、研究者は、ソーシャルメディアが組織とその強さを成長させるのか、あるいはオンライン上の社会的つながりが、ますます複雑化する運動環境での生存をより困難にするのかを検討する必要がある。さらに重要なことは、ICTが個人の参加や政治変化に対する個人の理解にどのような影響を与えるかを研究者は検証する必要があるということである。メッセージのレベルでは、ICTは運動のフレームや動員プロセスにおける使い方の性質を根本的に変えるかもしれない。文字数制限のあるソーシャル・メディア・プラットフォームは、より精緻でないフレームを奨励し、おそらくは、アクティヴィストが自分たちのアイデアをトレンドに乗せ続けようとするため、メッセージングをより実験的に使うようになる。さらに、トレンドを維持しようとする努力は、積極的にコンテンツを検閲するフェイスブックのような人気プラットフォームの商業的な要請によって支援される(あるいは阻害される)かもしれない。

### 3.1.2. 戦略研究

戦略は社会運動の生命線である。しかし、つい最近までその研究は控えめであった(レビューは (Maney et al. 2015))。戦略に対する現在の学術的アプローチは統合的であり、戦略が構造と主体性の両方からどのように影響を受けているかを考察している (McCammon 2012)。戦略を研究するための支配的なアプローチが出現するかどうかはまだ不明である。現在の研究では、マイクロ、メゾ、マクロレベルのそれぞれの意思決定に焦点が当てられている。例えば Jasper (2004, 2012) は、エージェンシーと個人の意思決定の重要性を強調している。Jasperは、ジレンマ、つまり潜在的なリスク、コスト、利益の選択に、アクティヴィストが何度も直面することを明らかにするため、社会学者は選択ポイント (choice points) を分析すべきだと主張している。この視点の価値は、より一般的な戦略に光を当て、運動目標に反しているように見える行動を説明することであると Jasper は示唆する。さらに、個人の意思決定に注目することで、アクティヴィストはある時点の自らの選択の結果を知りうるができない、ということ学者たちに思い起こさせる。彼らができるのは、こうした結果を遡及的に追跡し、現在の組織的・政治的現実を照らして過去の決定の意味を検討することだけである。

対照的に、Fligstein and McAdam (2012) はメゾレベルのアプローチを採用し、「戦略的行為フィールド (strategic action fields)」に焦点を当てている。そこでは、個人や集団のアクターが「フィールドの目的、フィールドにおける関係性 (誰が権力を持ち、なぜ権力を持つのかを含む)、フィールドのルールに関する一連の共通理解のもとで、互いの知識をもって」相互作用している。この視点は、運動アクターが現状を強化する時、あるいはこれに挑戦する時

の、フィールドの安定性と変化の両方を説明することを可能にすると彼らは主張する。フィールドは通常、比較的安定している。しかし、経済衰退のような「外的衝撃」が、戦略的行為フィールドに「断裂」(Sewell 1996)を引き起こし、相互作用の秩序(とその結果)が疑問視されることがある。未確定なフィールドは創造的なイノベーションを生み出すのに適しているが、戦略的な意思決定をより困難にする。例えば、Armstrong (2005) は、サンフランシスコのゲイとレズビアン組織は、フィールドが流動的であったときに、フレームを選択し、戦略的に行動することが困難であったことを明らかにしている。

注目すべきは、戦略的行為フィールド理論が、社会学者と経営学者に共通する新制度主義に大きく依存している点である。新制度論は、行為者をより大きな行為フィールドの中に位置づけることで、個人や組織の行動の規則性を説明するものであり、行為フィールドを、多かれ少なかれ力を持つ行為者間の関係のネットワークで構成される構造化された社会空間として概念化する。また、あるフィールドで活動するアクターは特定の価値や利益を志向し、これらの価値が蓄積される「ゲームのルール」に合意しているため、フィールドの秩序は比較的首尾一貫していると主張し、フィールドの外部にある力が「ゲームのルール」やフィールドのアウトプットに影響を与えうることを示唆している(DiMaggio and Powell 1983)。新制度論者が、あるフィールドの組織が互いに似てくる過程(Scott 2003; Zucker 1987)、つまり同型性を強調することが多いのに対して、戦略的行為フィールド理論は、いつ(そしてなぜ)制度的変化が起こるのかを重視する。このように、戦略研究は社会運動のミクロ・メゾ領域において、新たな展開として現れてきている。

### 3.2. ヨーロッパとアメリカ

社会運動を研究するアメリカの社会学者たちは、ヨーロッパの研究者たちから孤立している。この分野を統一しようとする大西洋を越えた努力はあったが、アメリカの学者たちがアメリカの運動とそのアメリカの文脈への影響についてのみ理論化することに固執し、ヨーロッパの学問が簡単に分類されない傾向があるため、進展は遅れている(Roggeband and Klandermans 2017: 23)。とはいえ、ヨーロッパの社会運動研究がアメリカの研究とは異なる点は少なくとも3つあり、言及に値する。第一に、ヨーロッパの学者は日常的に比較分析を行っている(Ancelovici 2016; Giugni and Lorenzini 2016; Neveu 2022; Porta 2014)が、アメリカの動向は不明確である。例えば、アメリカの学者は、ある歴史的瞬間において、志を同じくする社会運動グループ(Benford 1993; Blee 2002; Staggenborg 1991)や対立する運動組織が互いにどのように反応しあうかを比較することがある(Rohlinger 2014)。これとは対照的に、ヨーロッパの研究者たちは、国を超えた文脈の中で、極右政治界で活動する運動間の類似性を日常的に考察している(Caiani and Borri 2022; Klandermans and Mayer 2006; Rydgren 2012)。第二に、ヨーロッパの研究者は一貫して社会心理学的アプローチを用いて社会運動とそれに参加する人々を研究しており、政治的社会化、コミットメント、政治文化が個人の集合行為への参加意欲にどのような影響を与えるかについて、アメリカの研究者よりも徹底的な理解を生み出している(Accornero and Fillieule 2016; Klandermans 2014)。例えば、van Leeuwenら(Leeuwen, Stekelenburg, and Klandermans 2016)は、デモ参加者のデモ発生時の認識が、彼らの将来的な集合行為への参加意欲をどのように形成するかを分析している。第三に、ヨーロッパの研究者たちは一貫して、社会運動の分析において権力を

目に見える変数としている。他方、アメリカの社会学者たちは、限られた権力しか持たない挑戦者たちがどのように制度変革に影響を与えるかに関心を寄せているものの、権力は遍在する不変のものとして扱うことが多い (Accornero and Fillieule 2016)。

ヨーロッパにおける展開のひとつは、社会運動の拡散 (diffusion) の特定化が進んでいることである。例えば、Mattoni and della Porta (2014) は、その編著の中で「厚い」拡散と「薄い」拡散を区別し、これらの違いが運動の継続性や政治的文脈を超えた思想や戦術の伝達にとって何を意味するのかを概説している。厚い拡散は、組織、人、技術を通じてアイデアや戦術を広める。具体的には、濃厚な拡散は、濃密な組織ネットワーク、アクティヴィストのメーリングリストやウェブサイト、アイデアや戦術を議論し発展させるための年に一度の顔を合わせた集まりに依存し、それらは時間と空間を越えて伝達される。対照的に、薄い拡散は、戦術のレパートリー、フレーム、アイデアを拡散するために、(組織ではなく) 個々のアクティヴィスト、フェイスブックなどの商業的なソーシャルメディア・プラットフォーム、不定期の会合に依存している。その結果、薄い拡散は「リゾーム的」、つまり非直線的で反復的であり、誰が創発的な実践を伝達し、誰がそれを採用するかの境界を曖昧にする (リゾームの概念を社会運動に適用した別の例として、Khasnabish (2013) を参照)。

#### 4. *Social Movement Studies* 誌の最新動向 2021—23

前節まで、2010年代以降の社会学の社会運動論の研究動向を見てきた。本節では、ヨーロッパを拠点とする社会運動論の国際誌である

*Social Movement Studies* 誌の 2021—23 年 10 月現在 (20—22 号) の論文 (N=120) を対象としながら、最新の動向を分析する。動向をつかむために、掲載論文を出版年、存在論/認識論、理論<sup>5</sup>、方法、対象に分けて筆者がコーディングした。

##### 4.1. 特集の傾向

同誌においては定期的に特集が組まれており、それが動向の母数に一部影響していると思われるが、最新の研究動向をまとめた形で確認するための良い機会として読者に提供されている。2021 年 20 巻 2 号では、特集「Conceptualizing the Context of Collective Action: Field, Space, Arena」において、社会運動のミクロからマクロレベルにおける空間的理論が検討されている (Daphi and Zimmermann 2021; Galán and Fersch 2021; Göppfarth 2021; Nadal 2021; Nah 2021; Orofino 2021)。同巻 3 号では、「Prefiguration – Co-optation – Simulation: Movements and Activism beyond Post-politics」特集が生まれ、予示的政治や社会運動の創造性についての論文が掲載されている (Deflorian 2021; MacGregor 2021; Moor, Catney, and Doherty 2021; Novák 2021; Pellizzoni 2021; Varvarousis, Asara, and Akbulut 2021)。2022 年 21 巻 1—2 合併号では「The Politics of Alliances. The Making and Breaking of Social Movement Coalitions」特集が生まれ、社会運動間の連携や同盟研究の最先端を垣間見ることができる (Ataç and Steinhilper 2022; Carvalho 2022; Daphi, Anderl, and Deitelhoff 2022; Montgomery and Baglioni 2022; Portos and Carvalho 2022; Rone 2022; Satoh, Fung, and Mori 2022; Teixeira and Motta 2022; Wienkoop 2022)。

2023 年 22 巻 3 号では「Re-imagining Democracy: Legacy, Impact and Lessons of Spain's 15-M Movement」特集が生まれ、社会労働党政権の

緊縮財政に抗議するスペインの「15M（キンセ・エメ）運動」についての論文が提出されている（Agenjo-Calderón, Moral-Espín, and Clemente-Pereiro 2023; Barbas and Treré 2023; Calvo and Echeverría 2023; Consejero and Janoschka 2023; Diz, Estévez, and Martínez-Buján 2023; Fominaya and Feenstra 2023; Jiménez-Sánchez and García-Espín 2023; Nez 2023; Romanos, Sola, and Rendueles 2023）。また同巻5-6合併号では、「Hybrid Protest Logics and Relational Dynamics: Networked Movements in Asia」特集が生まれ、台湾、香港、インドネシア、タイ、中国における社会運動の大規模動員を対象とした、関係論的アプローチに基づく論文が紹介されている（Caraway 2023; Cassegård 2022; Choi 2023; Ho 2023; Jung 2023; Liang and Lee 2023; Liu and Liu 2023; Ma and Cheng 2021; Thompson and Cheng 2023; Yuen and Tang 2023）。上記のように、同誌の特集は、昨今の社会運動論において関心が高い理論的アプローチや、運動が隆盛している／いた地域を対象として設定される傾向にある。

#### 4.2. 方法論的傾向

方法論的な拮がりについてはどうだろうか。筆者が論文を方法論別にコーディングしたのが表3である。同誌は基本的には、定性的研究の論文が一貫して多い傾向にある（表3）。次いで定量的研究が多く、近年混合研究法が増加傾向にある。これらの3分類は大まかな分類であり、それぞれの方法内部で、複数の方法論が組

み合わされて使われていることが多い。

定性的研究をより細かく見ていくと、インタビュー調査（母集団は研究によって多岐にわたる）、事例研究、ドキュメント分析、言説分析、（非）参与観察、フィールドワーク、エスノグラフィ、グラウンデッド・セオリー、質的比較分析（QCA）、過程追跡法（process tracing method）、理論分析、メディア分析（SNS・運動ドキュメント・新聞・雑誌）、ビデオ分析などが挙げられている。特にインタビュー調査（N=36）、事例研究（N=16）、ドキュメント分析（N=12）が、手法として最も多く採用されている。また、インタビュー調査は、事例研究やドキュメント分析と併用されている。

定量的研究を細かく見ていくと、パネル調査、現地でのパネル調査、SNSのコーパス分析、イベント分析、時系列分析、社会ネットワーク分析などで、その多くが多変量解析法（ロジステック回帰、SEMなど）を分析手法として用いていることがわかる。最も採用されているのはパネル調査（N=7）で、次いでSNSのコーパス分析（N=6）、イベント分析（N=2）となった。

混合研究法を採用した研究では、定性的・定量的研究を併用した研究が大半をしめており、上記研究手法の幅広い組み合わせが見られた。とりわけ実験的で興味深いものとしては、コペンハーゲンの公衆の前で介入実験を行い、それをビデオで録画した後、公衆の反応を事後分析することで、アクティビズムの従来のレパトリーと創造的なレパトリーの効果の差異を

表3 方法論の3大分類

巻（出版年）	20（2021年）	21（2022年）	22（2023年）	合計
定性的	34（89%）	28（68%）	26（63%）	88
定量的	3（8%）	10（24%）	7（17%）	20
混合研究法	1（3%）	3（7%）	8（20%）	12
合計	38（100%）	41（100%）	41（100%）	120



検証するというものがある (Duncombe and Harreby 2022)。また、上述の2023年22巻5-6合併号における「Hybrid Protest Logics and Relational Dynamics」特集では、混合研究方法が多く採用されていた。デモや集会現場におけるランダムサンプリングを用いたインタビュー対象の選定や、現場での直接的なパネル調査に基づいた共同研究などがなされている。研究コストこそ低くはないものの、定性・定量的研究を統合した包括的な大規模動員に対する調査設計としては魅力的である。

#### 4.3. 理論的傾向

理論的な傾向についてはどうだろうか。社会運動論は周知の通り、集合行動論の批判から生じた個人の合理的選択を基盤にした資源動員論や政治過程論が、主流の理論的立場となってきた。これら諸論は、それまで主流だった集合行動論が想定していた人間の非合理的であり一時的な集合行為としての社会運動という仮説に対し、アフリカ系アメリカ人らが戦略的かつ持続的に展開する公民権運動を対象とするなかで集合行動論に対する対立仮説として提示されたものであり、その後他の運動分析にも有力な仮説として採用されていくことになる (Buecheler 1990; Minkoff 1999; Piven and Cloward 1978)。ここでは、運動行為者がどのような戦略を創造するのか、動員にどのような資源が必要か、運動が挑戦する社会構造の強度は如何なるものか (機会構造)、運動の呼びかけは公衆にどのように伝えられるのか／伝わるのか (フレーミング)、などの下位概念が注目され、経験的研究に採用されていった。

これら構造的アプローチは、1990年代に文化的アプローチに批判を受けることになる。Jasper (1997, 2012) などによる文化的アプローチは、構造的アプローチは構造的バイアスを抱えており、行為者のエージェンシーやマイクロ動

態を看過していると批判した。構造的アプローチは文化的アプローチによる批判により修正され、「たたかひの動態 (dynamics of contention)」論や、「たたかひの政治<sup>6</sup> (contentious politics)」論のような、マクロ・メゾ・ミクロレベルを架橋するような関係論的アプローチに移行していく。

しかしこれに対しても文化的アプローチは、構造的アプローチが、感情や情動を因果関係の主要な変数とみなしていないとして批判を展開しつつ新たな理論形成を試みており、これらアプローチは理論的緊張関係にある。他方、この緊張関係が社会運動論を盛り上げる要因にもなっており、参入しやすいインフラにもなっている。他方で、構造的—文化的アプローチに含まれない諸理論は、参入が難しくなる傾向があると思われる。

以上を踏まえつつ、存在論的／認識論的傾向を明らかにするために、研究のなかでこれを明示的に表明したものに限り、存在論的／認識論的傾向の大分類についてみていく (N=66、全体の55%)。最も多いのは、構造的アプローチである「たたかひの政治」(contentious politics) 論であり (N=27)、次いで文化的アプローチ (N=14)、ジェンダー／フェミニズム研究 (N=6) となっている。

次に、理論的傾向について見ていく。理論の研究への適用については、多くの研究は複数の理論的基盤を参照しているため、該当論文において最も中心的に扱われている理論を参照し、コーディングした (N=120)。最も多いのは、連携／同盟論 (coalition) (N=11) で、次いでフレーム分析 (N=9)、動員構造 (N=8)、感情 (N=8)、メディア理論 (N=8)、ポリシング／抑圧論 (N=6)、民主主義論 (N=6)、予示的政治論 (N=5)、戦略論 (N=4)、空間論 (フィールド・アリーナ・スペース・マルクス主義)

(N=4)、関係論的アプローチ (N=3)、沈黙期構造 (abeyance structure) (N=2)、カリスマ論 (N=2)、ジェンダー論 (N=2)、記憶・集合的アイデンティティ (N=2)、新自由主義批判 (N=2)、機会構造論 (N=2) などとなっている。構造的／文化的アプローチには直接的には含まれないものとしては、コモンズ論、言説分析、インターセクショナリティ、グラムシ主義サバルタン論、寡頭政治論、後期近代の主体論、遷移分析、社会運動のスクーリング論、持続的唯物論などがあつた (それぞれN=1)。

## 5. まとめ

本論では第一に、社会運動論の社会科学における大局的な動向について、英語圏と日本語圏において検討した。サンプリングの母集団が Google Scholar に限定されてはいたものの、大局的には社会運動論の学術論文は増加傾向にあることが確かめられた。第二に、社会科学領域の社会運動論の近年の共通関心について考察した。社会科学領域においては、社会運動の感情、戦略と戦術、インターネットの役割についての共通する関心が見られた。これは、現代社会の変化とも関連する関心と接続された形で登場したものと言えるだろう。第三に、社会学の社会運動論の動向について、いくつかのハンドブックを用いて考察した。社会学の社会運動論も社会科学の動向と同じく、マスメディアと社会運動の関係性や、社会運動の戦略研究を主要な関心としてきていることが分かった。欧米圏の動向を踏まえた上で、日本の社会運動論の蓄積はどの方向に向かっているのかについて考察することも、課題として見えてきた。第四に、主要な国際誌である *Social Movement Studies* の最新の動向 (2021-23) について分析した。同誌においては、定期的特集が組まれており、それ

は方法論的な新展開を検討するものから、特定の地域で近年展開した／している大規模動員に関する特集が組まれていることが分かった。また、同誌は、方法論的には定性的研究が強い傾向が見られた。さらに、理論的には、社会運動論の構造的アプローチと文化的アプローチが主流であったが、それに当てはまらない社会理論を動員した研究も見られた。本レビューの限界としては、*Social Movement Studies* と双璧である *Mobilization* 誌のレビューを行っていないため、アメリカを中心とした社会運動研究の動向についてはおろそかになっている点が挙げられる。この点については、今後の課題としたい。

## 6. 参考文献

- Accornero, Guya, and Olivier Fillieule. [2016]. "Social Movement Studies in Europe." 1–18. doi: 10.2307/j.ctvgs0c35.6.
- Agenjo-Calderón, Astrid, Lucía Del Moral-Espín, and Raquel Clemente-Pereiro. [2023]. "15-M Movement and Feminist Economics: An Insight into the Dialogues between Social Movements and Academia in Spain." *Social Movement Studies* 22(3):324–42. doi: 10.1080/14742837.2022.2123315.
- Ancelevici, Marcos. [2016]. *Street Politics in the Age of Austerity*. Amsterdam: Amsterdam University.
- Andrews, Kenneth T., and Neal Caren. [2010]. "Making the News." *American Sociological Review* 75(6):841–66. doi: 10.1177/0003122410386689.
- Armstrong, Elizabeth A. [2005]. "From Struggle to Settlement: The Crystallization Of A Field Of Lesbian/Gay Organizations In San Francisco, 1969–1973." Pp. 161–88 in *Social Movements and Organization Theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ataç, Ilker, and Elias Steinhilper. [2022]. "Arenas of Fragile Alliance Making. Space and Interaction in Precarious Migrant Protest in Berlin and Vienna." *Social Movement Studies* 21(1–2):152–68. doi:

- 10.1080/14742837.2020.1837099.
- Banerjee, Tarun. [2013]. “Research in Social Movements, Conflicts and Change.” *Research in Social Movements, Conflicts and Change* Volume 36(Issue rsmcc/2013/s0163-786x(2013)36/s0163-786x(2013)36/production):39–75. doi: 10.1108/s0163-786x(2013)0000036005.
- Barbas, Ángel, and Emiliano Treré. [2023]. “The Rise of a New Media Ecosystem: Exploring 15M’s Educommunicative Legacy for Radical Democracy.” *Social Movement Studies* 22(3):381–401. doi: 10.1080/14742837.2022.2070738.
- Benford, Robert D. [1993]. “Frame Disputes within the Nuclear Disarmament Movement.” *Social Forces* 71(3):677. doi: 10.2307/2579890.
- Bennett, Lance W., and Alexandra Segerberg. [2015]. “Communication in Movements.” Pp. 367–83 in *Oxford handbooks in politics & international relations, Oxford handbooks in politics & international relations*, edited by D. della Porta and M. Diani. Oxford: Oxford handbooks in politics & international relations.
- Blee, Kathleen. [2002]. *Inside Organized Racism: Women in the Hate Movement*. Los Angeles: University of California Press.
- Buecheler, Steven. [1990]. *Women’s Movements in the United States*. New Brunswick: Rutgers University Press.
- Caiani, Manuela, and Rossella Borri. [2022]. “Social Movement Studies in Europe, The State of the Art.” 69–85. doi: 10.1515/9781785330988-008.
- Calvo, Kerman, and Aitor Romeo Echeverría. [2023]. “15-M Mobilizations and the Penalization of Counter-Hegemonic Protest in Contemporary Spain.” *Social Movement Studies* 22(3):421–37. doi: 10.1080/14742837.2022.2061943.
- Caraway, Teri L. [2023]. “Labor’s Reversal of Fortune: Contentious Politics and Executive Aggrandizement in Indonesia.” *Social Movement Studies* 22(5–6):689–705. doi: 10.1080/14742837.2021.2010529.
- Carvalho, Camila. [2022]. “‘Cooperate to Win’: The Influence of the Chilean Student Movement on the 2012 Budget Law.” *Social Movement Studies* 21(1–2):62–78. doi: 10.1080/14742837.2020.1770066.
- Cassegård, Carl. [2022]. “The Recovery of Protest in Japan: From the ‘Ice Age’ to the Post-2011 Movements.” *Social Movement Studies* 1–16. doi: 10.1080/14742837.2022.2047641.
- Choi, Susanne YP. [2023]. “Doing and Undoing Gender: Women on the Frontline of Hong Kong’s Anti-Extradition Bill Movement.” *Social Movement Studies* 22(5–6):786–801. doi: 10.1080/14742837.2022.2086114.
- Consejero, Fabiola Mota, and Michael Janoschka. [2023]. “Transforming Urban Democracy through Social Movements: The Experience of Ahora Madrid.” *Social Movement Studies* 22(3):343–60. doi: 10.1080/14742837.2022.2028615.
- Corrigall-Brown, Catherine, and Rima Wilkes. [2012]. “Picturing Protest.” *American Behavioral Scientist* 56(2):223–43. doi: 10.1177/0002764211419357.
- Crossley, Alison Dahl. [2015]. “Facebook Feminism: Social Media, Blogs, and New Technologies of Contemporary U.S. Feminism\*.” *Mobilization: An International Quarterly* 20(2):253–68. doi: 10.17813/1086-671x-20-2-253.
- Daphi, Priska, Felix Anderl, and Nicole Deitelhoff. [2022]. “Bridges or Divides? Conflicts and Synergies of Coalition Building across Countries and Sectors in the Global Justice Movement.” *Social Movement Studies* 21(1–2):8–24. doi: 10.1080/14742837.2019.1676223.
- Daphi, Priska, and Jens Zimmermann. [2021]. “‘Like a Family Tree’? Memories of ‘68 in the German Anti-Austerity Movement Blockupy.” *Social Movement Studies* 20(1):93–114. doi: 10.1080/14742837.2020.1729719.
- Deflorian, Michael. [2021]. “Refigurative Politics: Understanding the Volatile Participation of Critical Creatives in Community Gardens, Repair Cafés and Clothing Swaps.” *Social Movement Studies* 20(3):346–63. doi: 10.1080/14742837.2020.1773250.
- DiMaggio, Paul J., and Walter W. Powell. [1983]. “The Iron Cage Revisited: Institutional Isomorphism and Collective Rationality in Organizational Fields.” *American Sociological Review* 48(2):147. doi:

- 10.2307/2095101.
- Díz, Carlos, Brais Estévez, and Raquel Martínez-Buján. [2023]. “Caring Democracy Now: Neighborhood Support Networks in the Wake of the 15-M.” *Social Movement Studies* 22(3):361–80. doi: 10.1080/14742837.2022.2033115.
- Doerr, Nicole, Alice Mattoni, and Simon Teune. [2013]. *Advances in the Visual Analysis of Social Movements*. Emerald Group Publishing.
- Duncombe, Stephen, and Silas Harrebye. [2022]. “The Copenhagen Experiment: Testing the Effectiveness of Creative vs. Conventional Forms of Activism.” *Social Movement Studies* 21(6):741–65. doi: 10.1080/14742837.2021.1967125.
- Earl, Jennifer, Katrina Kimport, Greg Prieto, Carly Rush, and Kimberly Reynoso. [2010]. “Changing the World One Webpage at a Time: Conceptualizing and Explaining Internet Activism.” *Mobilization: An International Quarterly* 15(4):425–46. doi: 10.17813/maiq.15.4.w03123213lh37042.
- Earl, Jennifer, Andrew Martin, John D. McCarthy, and Sarah A. Soule. [2004]. “The Use of Newspaper Data in the Study of Collective Action.” *Annual Review of Sociology* 30(1):65–80. doi: 10.1146/annurev.soc.30.012703.110603.
- Fligstein, Neil, and Doug McAdam. [2012]. *A Theory of Fields*. Oxford University Press.
- Fominaya, Cristina Flesher, and Ramón A. Feenstra. [2023]. “Reconsidering Social Movement Impact on Democracy: The Case of Spain’s 15-M Movement.” *Social Movement Studies* 22(3):273–303. doi: 10.1080/14742837.2023.2190090.
- Galán, Leticia Prado, and Barbara Fersch. [2021]. “Where Did the Indignados Go? How Movement Sociality Can Influence Action Orientation and Ongoing Activism after the Hype.” *Social Movement Studies* 20(1):2–19. doi: 10.1080/14742837.2020.1722627.
- Giugni, Marco, and Jasmine Lorenzini. [2016]. “Social Movement Studies in Europe.” 102–17. doi: 10.2307/j.ctvgs0c35.12.
- Göpffarth, Julian. [2021]. “Activating the Socialist Past for a Nativist Future: Far-Right Intellectuals and the Prefigurative Power of Multidirectional Nostalgia in Dresden.” *Social Movement Studies* 20(1):57–74. doi: 10.1080/14742837.2020.1722628.
- 濱西栄司・鈴木彩加・中根多恵・青木聡子・小杉亮子. [2020]. 『問いからはじめる社会運動論』有斐閣.
- Ho, Ming-Sho. [2023]. “Aiming for Achilles’ Heel: A Relational Explanation of the Ascendancy of pro-Nuclear Activism in Taiwan, 2013-2020.” *Social Movement Studies* 22(5–6):628–47. doi: 10.1080/14742837.2021.1988912.
- 本田宏. [2022]. 「社会運動論の再整理——政治学の視点から」『北海学園大学法学研究』58(1): 1-33.
- Jasper, James. [1997]. *The Art of Moral Protest*. Chicago: University of Chicago Press.
- Jasper, James M. [2012]. “Strategies for Social Change.” 23–42. doi: 10.5749/minnesota/9780816672899.003.0002.
- Jiménez-Sánchez, Manuel, and Patricia García-Espin. [2023]. “The Mobilising Memory of the 15-M Movement: Recollections and Sediments in Spanish Protest Culture.” *Social Movement Studies* 22(3):402–20. doi: 10.1080/14742837.2022.2061941.
- Jung, Jai Kwan. [2023]. “The Candlelight Protests in South Korea: A Dynamics of Contention Approach.” *Social Movement Studies* 22(5–6):767–85. doi: 10.1080/14742837.2022.2053515.
- Klandermans, Bert, and Nonna Mayer. [2006]. *Extreme Right Activists in Europe, Through the Magnifying Glass*. London and New York: Routledge.
- Klandermans, P. G. [2014]. “Presidential Address.” *Political Psychology* 35(1):1–22. doi: 10.1111/pops.12167.
- Leeuwen, Anouk, Jacquelin Stekelenburg, and Bert Klandermans. [2016]. “The Phenomenology of Protest Atmosphere: A Demonstrator Perspective.” *European Journal of Social Psychology* 46(1):44–62. doi: 10.1002/ejsp.2139.
- Liang, Hai, and Francis L. F. Lee. [2023]. “Opinion Leadership in a Leaderless Movement: Discussion of the Anti-Extradition Bill Movement in the ‘LIHKG’ Web Forum.” *Social Movement Studies* 22(5–6):670–88. doi: 10.1080/14742837.2021.1989294.

- Lievrouw, Leah. [2011]. *Alternative and Activist New Media: Digital Media and Society*. New York: Polity.
- Liu, Nian, and Jun Liu. [2023]. “Leading with Hearts and Minds: Emotion Contagion in China’s Online Activism.” *Social Movement Studies* 22(5–6):728–50. doi: 10.1080/14742837.2021.2011716.
- Ma, Ngok, and Edmund W. Cheng. [2021]. “Professionals in Revolt: Specialized Networks and Sectoral Mobilization in Hong Kong.” *Social Movement Studies* 1–22. doi: 10.1080/14742837.2021.1988914.
- MacGregor, Sherilyn. [2021]. “Finding Transformative Potential in the Cracks? The Ambiguities of Urban Environmental Activism in a Neoliberal City.” *Social Movement Studies* 20(3):329–45. doi: 10.1080/14742837.2019.1677224.
- Maney, Gregory M., Rachel V. Kutz-Flamenbaum, and Deana A. Rohlinger. [2015]. “An Introduction to Strategies for Social Change.” in *Strategies for Social Change*, edited by G. M. Maney, R. V. Kutz-Flamenbaum, and D. A. Rohlinger. Minnesota Scholarship Online.
- McCammon, Holly J. [2012]. *The U.S. Women’s Jury Movements and Strategic Adaptation: A More Just Verdict*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McCarthy, John D., Clark McPhail, and Jackie Smith. [1996]. “Images of Protest: Dimensions of Selection Bias in Media Coverage of Washington Demonstrations, 1982 and 1991.” *American Sociological Review* 61(3):478–99.
- 道場親信・成元哲. [2004]. 「社会運動は社会をつくる？」大畑裕嗣・成元哲・道場親信・樋口直人編『社会運動の社会学』有斐閣, 1–11.
- Minkoff, Debra C. [1999]. “Bending with the Wind: Strategic Change and Adaptation by Women’s and Racial Minority Organizations.” *American Journal of Sociology* 104(6):1666–1703. doi: 10.1086/210220.
- Monterde, Arnau, Antonio Calleja-López, Miguel Aguilera, Xabier E. Barandiaran, and John Postill. [2015]. “Multitudinous Identities: A Qualitative and Network Analysis of the 15M Collective Identity.” *Information, Communication & Society* 18(8):930–50. doi: 10.1080/1369118x.2015.1043315.
- Montgomery, Tom, and Simone Baglioni. [2022]. “‘Nothing about Us without Us’: Organizing Disabled People’s Solidarity within and beyond Borders in a Polarized Age.” *Social Movement Studies* 21(1–2):118–34. doi: 10.1080/14742837.2020.1770069.
- Moor, Joost de, Philip Catney, and Brian Doherty. [2021]. “What Hampers ‘Political’ Action in Environmental Alternative Action Organizations? Exploring the Scope for Strategic Agency under Post-Political Conditions.” *Social Movement Studies* 20(3):312–28. doi: 10.1080/14742837.2019.1708311.
- Myers, Daniel J., and Beth Schaefer Caniglia. [2004]. “All the Rioting That’s Fit to Print: Selection Effects in National Newspaper Coverage of Civil Disorders, 1968–1969.” *American Sociological Review* 69(4):519–43. doi: 10.1177/000312240406900403.
- Nadal, Lluís de. [2021]. “On Populism and Social Movements: From the Indignados to Podemos.” *Social Movement Studies* 20(1):36–56. doi: 10.1080/14742837.2020.1722626.
- Nah, Alice M. [2021]. “Navigating Mental and Emotional Wellbeing in Risky Forms of Human Rights Activism.” *Social Movement Studies* 20(1):20–35. doi: 10.1080/14742837.2019.1709432.
- Neveu, Erik. [2022]. “Social Movement Studies in Europe, The State of the Art.” 21–36. doi: 10.1515/9781785330988-005.
- Nez, Héloïse. [2023]. “What Has Become of the Indignados? The Biographical Consequences of Participation in the 15M Movement in Madrid (2011–19).” *Social Movement Studies* 22(3):304–23. doi: 10.1080/14742837.2021.1977113.
- Novák, Arnošt. [2021]. “Every City Needs a Klinika: The Struggle for Autonomy in the Post-Political City.” *Social Movement Studies* 20(3):276–91. doi: 10.1080/14742837.2020.1770070.
- 大畑裕嗣・成元哲・道場親信・樋口直人編. 2004. 『社会運動の社会学』有斐閣.
- Oliver, Pamela E., and Daniel J. Meyer. [1999]. “How Events Enter the Public Sphere: Conflict, Location,

- and Sponsorship in Local Newspaper Coverage of Public Events.” *American Journal of Sociology* 105(1):38–87. doi: 10.1086/210267.
- Orofino, Elisa. [2021]. “Framing, New Social Identity and Long-Term Loyalty. Hizb Ut-Tahrir’s Impact on Its Members.” *Social Movement Studies* 20(1):75–92. doi: 10.1080/14742837.2020.1722629.
- Pellizzoni, Luigi. [2021]. “Prefiguration, Subtraction and Emancipation.” *Social Movement Studies* 20(3):364–79. doi: 10.1080/14742837.2020.1752169.
- Piven, Frances Fox, and Richard Cloward. [1978]. *Poor People’s Movements: Why They Succeed, How They Fail*. New York: Basic Books.
- Porta, Donatella Della. [2014]. *Mobilizing for Democracy: Comparing 1989 and 2011*. Oxford: Oxford University Press.
- Porta, Donatella Della, Mario Diani, Colin Barker, and Michael Lavalette. [2015]. “The Oxford Handbook of Social Movements.” doi: 10.1093/oxfordhb/9780199678402.013.13.
- Porta, Donatella della, and Alice Mattoni. [2014]. *Spreading Protest: Social Movements in Times of Crisis*. Colchester: ECPR Press.
- Portos, Martín, and Tiago Carvalho. [2022]. “Alliance Building and Eventful Protests: Comparing Spanish and Portuguese Trajectories under the Great Recession.” *Social Movement Studies* 21(1–2):42–61. doi: 10.1080/14742837.2019.1681957.
- Roggeband, Conny, and Bert Klandermans. [2017]. *Handbook of Social Movements Across Disciplines: Second Edition*. Springer.
- Rohlinger, Deana A. [2014]. *Abortion Politics, Mass Media, and Social Movements in America*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rohlinger, Deana A., and Leslie A. Bunnage. [2015]. “Connecting People to Politics over Time? Internet Communication Technology and Retention in MoveOn.Org and the Florida Tea Party Movement.” *Information, Communication & Society* 18(5):539–52. doi: 10.1080/1369118x.2015.1008541.
- Rohlinger, Deana A., and Jesse Klein. [2012]. “Visual Landscapes and the Abortion Issue.” *American Behavioral Scientist* 56(2):172–88. doi: 10.1177/0002764211419487.
- Rohlinger, Deana, and Jordan Brown. [2013]. “Mass Media and Institutional Change: Organizational Reputation, Strategy, and Outcomes in the Academic Freedom Movement.” *Mobilization: An International Quarterly* 18(1):41–64. doi: 10.17813/maiq.18.1.q6h62418323x7858.
- Romanos, Eduardo, Jorge Sola, and César Rendueles. [2023]. “The Political Economy of the Spanish Indignados: Political Opportunities, Social Conflicts, and Democratizing Impacts.” *Social Movement Studies* 22(3):438–57. doi: 10.1080/14742837.2022.2061940.
- Rone, Julia. [2022]. “Fake Profiles, Trolls, and Digital Paranoia: Digital Media Practices in Breaking the Indignados Movement.” *Social Movement Studies* 21(1–2):25–41. doi: 10.1080/14742837.2019.1679108.
- Roy, William G. [2010]. *Reds, Whites, and Blues: Social Movements, Folk Music, and Race in the United States*. Princeton: Princeton University Press.
- Rydgren, Jens. [2012]. *Class Politics and the Radical Right*. Oxon: Routledge.
- Satoh, Keiichi, Wan Yin Kimberly Fung, and Keisuke Mori. [2022]. “Connections Result in a General Upsurge of Protests: Egocentric Network Analysis of Social Movement Organizations after the Fukushima Nuclear Accident.” *Social Movement Studies* 21(1–2):79–102. doi: 10.1080/14742837.2020.1770067.
- Scott, W. Richard. [2003]. *Organizations: Rational, Natural, and Open Systems Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall*.
- Sewell, William H. [1996]. “Historical Events as Transformations of Structures: Inventing Revolution at the Bastille.” *Theory and Society* 25(6):841–81. doi: 10.1007/bf00159818.
- Smith, J., J. D. McCarthy, C. McPhail, and B. Augustyn. [2001]. “From Protest to Agenda Building: Description Bias in Media Coverage of Protest Events in Washington, D.C.” *Social Forces* 79(4):1397–1423. doi: 10.1353/sof.2001.0053.
- Sobieraj, Sarah. [2010]. “Reporting Conventions:

- Journalists, Activists, and the Thorny Struggle for Political Visibility.” *Social Problems* 57(4):505–28. doi: 10.1525/sp.2010.57.4.505.
- Staggenborg, Suzanne. [1991]. *The Pro-Choice Movement: Organization and Activism in the Abortion Conflict*. Oxford: Oxford University Press.
- Strawn, Kelley. [2008]. “Validity and Media-Derived Protest Event Data: Examining Relative Coverage Tendencies in Mexican News Media\*.” *Mobilization: An International Quarterly* 13(2):147–64. doi: 10.17813/mai.13.2.b3j3p.1104244u073.
- Teixeira, Marco Antonio, and Renata Motta. [2022]. “Unionism and Feminism: Alliance Building in the Brazilian Marcha Das Margaridas.” *Social Movement Studies* 21(1–2):135–51. doi: 10.1080/14742837.2020.1770430.
- Thompson, Mark R., and Edmund W. Cheng. [2023]. “Transgressing Taboos: The Relational Dynamics of Claim Radicalization in Hong Kong and Thailand.” *Social Movement Studies* 22(5–6):802–21. doi: 10.1080/14742837.2022.2134107.
- 富永京子. [2021]. 「社会学の社会運動論——隣接領域との関連から」『新社会学研究』5: 33–45.
- Varvarousis, Angelos, Viviana Asara, and Bengi Akbulut. [2021]. “Commons: A Social Outcome of the Movement of the Squares.” *Social Movement Studies* 20(3):292–311. doi: 10.1080/14742837.2020.1793753.
- Wienkoop, Nina-Kathrin. [2022]. “Cross-Movement Alliances against Authoritarian Rule: Insights from Term Amendment Struggles in West Africa.” *Social Movement Studies* 21(1–2):103–17. doi: 10.1080/14742837.2020.1770068.
- Yuen, Samson, and Gary Tang. [2023]. “Instagram and Social Capital: Youth Activism in a Networked Movement.” *Social Movement Studies* 22(5–6):706–27. doi: 10.1080/14742837.2021.2011189.
- Vráblíková, and Kateřina. [2017]. “Protest and Social Movements in Political Science.” Pp. 33–55 in *Handbook of Social Movements Across Disciplines, Second Edition*. New York: Springer.
- Zucker, L. G. [1987]. “Institutional Theories of Organization.” *Annual Review of Sociology* 13(1):443–64. doi: 10.1146/annurev.so.13.080187.002303.
- <sup>1</sup> 例えば、International Sociological Associationの社会運動RC47・48に関しても、International Political Science AssociationのRCと共同で部会を設置することが少なくないし、パネル調査や国際共同研究においては、社会学者以外の社会学者と共同研究を行うことがむしろ常態ではないか。
- <sup>2</sup> この点については富永自身が、学際的な社会運動研究者としての自己の位置から、あえて社会学における社会運動論を、政治学と文化人類学における（とひとまず位置づけられている）研究群との対比における差異として析出する試みとも重なるものである（富永 2021:33）。富永の分析は、学際的展開としての社会運動論という母集団における相対的差違を材料として、政治学と文化人類学の蓄積から反照的に社会学の社会運動論の独自性を説明する方向へと展開していく一方、本論では、学際的な共通論点の動向に加え、社会学の社会運動論そのものの展開にむしろ注目していきたい。行き着く先は同じかもしれないが、社会運動論的に述べるならば、レビューにおける「競合者」（道場・成 2004: 4）としての役割を本論は担いたいのである。
- <sup>3</sup> Google Scholarを用いて、社会運動と他のディシプリンについてAND検索で全索引検索を行った。日本語の場合は、社会学における「歴史学」という単語の引用が傾向的に多いことから、「歴史学」カテゴリーには歴史社会学的な研究も一部含まれていることに留意する必要がある。Google Scholarでの検索結果は、おおよその傾向を示すものである。そのため、当該ディシプリンの単語が出てきたからと言って、必ずしも当該ディシプリンの論文であるわけではない。また、デジタル化に伴い近年の文献のヒット数が増えているというバイアスの可能性もあるため、諸変数を統制した値ではないことに留意されたい。
- <sup>4</sup> 社会心理学を検索ワードとすると、極端にヒット数が減るため、心理学を代替キーワードとし

た。

<sup>5</sup> 理論に関しては、一つの理論を参照するものだけでなく、複数の理論的関心から執筆している論文も少なくなかった。コーディングに関しては、全ての理論的前提を補足したが、単純集計においては論文内で最も比重の高い理論のみを採用した。

<sup>6</sup> Contentious politicsを「たたかひの政治」と邦訳し、いち早く翻訳書として紹介したのは、大畑裕嗣監訳による、シドニー・タロー『社会運動の力——集合行為の比較社会学』（1998=2006年、彩流社）である。